



マハティール首相辞任で流動化するマレーシアの政治情勢

中村 正志

2020 年 2 月

(7,455 字)

* 写真、図は文末に掲載しています

選挙なき政権交代か、失敗したクーデターか、はたまた総選挙か？

2 月 24 日午後 1 時、マレーシアのマハティール首相が国王に辞意を伝えた。他方、マハティール率いるマレーシア統一プリブミ党 (PPBM)、ならびにアズミン・アリ経済担当相ら人民公正党 (PKR) の反主流派が、与党連合である希望連盟からの離脱を表明した。これにより、希望連盟とその友党の勢力は連邦議会下院 (定数 222) の過半数を大きく割り込む 102 議席になった。

同日午後 7 時、国王がマハティールと会い、辞任を認めるとともに、改めてマハティールを新政権が発足するまでの暫定首相に任命した。その後、現時点 (25 日未明) までひとまず大きな動きはないものの、造反を起こしたアズミンらと起こされた希望連盟側の双方がマハティール支持を表明するという異様な展開になっている。議会内多数派がどの党派なのか不明な状況であり、政権がどうなるか見通しが立たない。この政情不安が新型コロナウイルス感染拡大の懸念に重なり、24 日のクアラルンプール市場の株価は急落した。

現時点で考えられるシナリオは次の 3 つである。

- (1) 造反組が過半数議員の支持を取りつけて「選挙なき政権交代」が実現する。
- (2) 希望連盟側がサバ伝統党 (ワリサン) の協力をつなぎ止めるとともにサラワク政党連合 (GPS) の協力を新たにとりつけて過半数を回復、造反は「失敗したクーデター」に終わる。
- (3) どちらの勢力も過半数を得られず、解散総選挙が行われる。

はたしてどうなるのか。想像をたくましくして今後の展望を語る前に、まずはこれまでの流れを振り返り、なぜこのようなことになってしまったのかを考えてみたい。

連立組み替えに動いた与野党

政界再編に向けて大きく事態が動いたのは2月23日の日曜日である。この日、与党側ではPPBMとPKRアズミン派、野党側では統一マレー人国民組織（UMNO）とサラワクのGPSが一斉に緊急幹部会を開催した。またこれに前後して、上記4勢力の代表が汎マレーシア・イスラーム党（PAS）、ワリサンの代表とともに国王に謁見したとも報じられた。彼らは、自分たちが下院の過半数勢力だと国王に訴えたものと見られる。

この連立組み替えが実現すれば、事実上の政権交代を意味する。元の与党勢力より野党勢力が多いからだ。上記6勢力のうち、与党側の議員はPPBMの26人とPKRアズミン派の11人、ならびにワリサンの9人で、あわせて46人しかいない。対して野党側の議員は、UMNOが39人、PASが18人、GPSが18人で75人におよぶ。

マレーシアの憲法は、「国王は自己の判断において、下院議員の過半数の信任を得そうな議員を、内閣を主宰する首相に任命する」[43条(2)(a)]と定めている。上記6勢力の議員の大多数が連立組み替えに同意すれば、下院定数222の過半数に達するため、「選挙なき政権交代」が実現することになる。

問題は、「6勢力の議員の大多数が連立組み替えに同意すれば」という前提条件が成立しているのか明確でないことだ。それどころか、マハティールが選挙なき政権交代に同意しているかどうかあやしい。24日午後にPPBMナンバー2のムヒディン・ヤシン内相が同党の希望連盟離脱を表明してからまもなく、マハティールは同党の会長職をも退くと発表した。マハティールが政界再編の首謀者だとしたら、党指導者のポストを手放すのは辻褄が合わない。

タイミングについても疑問が残る。希望連盟は2月21日の夜に最高幹部会を開き、退任時期はマハティールに一任すると決めたばかりである。この「勝利」の直後に、リスクのある政界再編を仕掛けるべき明確な理由が見当たらない。

事実、24日午前にマハティールと会談したアンワル・イブラヒム PKR 総裁とリム・グアンエン民主行動党（DAP）書記長（財務相）は、マハティールは政界再編騒ぎの黒幕ではなく、彼はUMNOとの共闘を望んでいないと述べ、マハティール支持を表明した。

こうしていまの混沌とした状況に至ったのだが、そもそもなぜ与野党が入り乱れて多数派工作を繰り広げることになったのか、もう少し時間をさかのぼって見てみよう。

首相に接近する野党

今回の政界再編騒ぎの発端は、野党第1党であるUMNOの最高評議会委員ロクマン・アダムによる「内部告発」であった。2月1日夜、ロクマンは、党総裁のザヒド・ハミディが同党とマハティール首相との共闘を画策しているとSNSで暴露し、翌日にはザヒド総裁の

ものとおぼしき音声録音されたオーディオ・クリップを証拠として公開した。

ロクマンの告発の目的は、与党に対して弱腰な姿勢をとるザヒド総裁を非難することであつた。ところがこれをきっかけに、かえって UMNO とマハティールとの共闘の可能性が公然と語られるようになる。昨年来、野党第 2 党の PAS がマハティールに対する支持を表明していることから、メディアでは、与党連合内で首相に近い勢力が UMNO や PAS などと組んで新たな連立政権を結成する可能性が取り沙汰された。主要日刊紙の『ザ・スター』が各党から何人の議員が新たな連立に加わるかの予測を 2 月 6 日付紙面に掲載するなど、報道各社は政界再編を現実味のあるシナリオとして扱った¹。構想中とされる「新たな政党連合」は、与党連合の「希望連盟」と野党連合の「国民戦線」から一語ずつとって「国民連盟 (Pakatan Nasional)」と呼ばれるようになり、瞬く間にこの名が広まった。

マハティール首相は、昨年から PAS のハディ・アワン党首や UMNO の幹部らとたびたび面会しており、そのことについて希望連盟の議員から繰り返し非難の声が出ていた。にもかかわらず、マハティールは今回も一時、PAS と UMNO の支持表明を歓迎する姿勢を見せていた。では、野党はなぜマハティールに接近したのか。また、与党内の批判を顧みず、マハティールが野党指導者と近しく接してきたのはなぜなのか。その背景には、首相後継をめぐる与党内の対立があつた。

こじれた首相後継問題

与党連合の希望連盟を構成する 4 政党の間では、マハティール首相の後継者に関する取決めがあつた。それは、2018 年 5 月の総選挙から 2 年以内、つまり今年の 5 月までに、最大党派である PKR のアンワル・イブラヒム総裁に首相の座を継承するというものである。

この取決めは総選挙前の 2018 年 1 月になされたが、このときアンワルは同性愛の罪で収監されていた²。選挙による政権交代の後、同氏は国王の恩赦によって自由の身となり、同年 10 月の補欠選挙に出馬して当選した。下院議員になったことで、アンワルは晴れて首相になる資格を手にした。

後継の時期についてマハティールは、首相就任当初は 4 党合意に沿った発言をしていた。ところがその後、今年 5 月以降も首相を続ける意向を匂わせ、昨年末には、今年 11 月にクアラルンプールで開催される APEC 首脳会議まで続投する意向を表明した。アンワルを含む与党各党の最高幹部はこれを受け入れたものの、PKR と与党第 2 党の DAP には公然と異を唱える議員が何人もいた。

また、そもそもマハティールはアンワルに後継する気がないのではないかと疑う見方も根強くあつた。首相が PKR 副総裁のアズミン・アリを経済担当相に抜擢して重用する一方、アンワルは入閣させず、冷淡な態度をとり続けてきたからだ。かたや政界復帰後のアンワルは、副総裁のアズミンと熾烈な党内権力闘争を繰り広げ、両者の和解は不可能になっていた。

マハティールが率いる PPBM と PKR のアズミン派議員を除外すれば、希望連盟勢力は下院の過半数には達しない。つまりマハティールは、アンワルの首相就任に対する事実上の拒否権を手にしていて、とはいえ PPBM の勢力は小さく、マハティールは自身の手駒だけで自由に後継者を選べる状況にはなかった。彼が 4 党合意から外れる行動を取ろうとするなら、野党の協力が必要だった。一部の野党指導者にとってこの状況は、権力に参画する好機と映っていたに違いない。

二大政党連合制の下で生じた政権交代

アンワルへの後継についてマハティール首相が乗り気でなかったことは、「(後継者としての適性について) 彼が良いとも悪いとも言っていない³⁾」「人びとが彼を望まないとしても私の問題ではない⁴⁾」などの発言から明白であろう。マハティールには、かつて副首相として自らに仕えていたアンワルを解任し投獄した過去がある。その背景には両者の間の権力闘争があった⁵⁾。20 年あまりの年月が過ぎたいまでも不信感が拭えなかったのだろう。

では、そもそもなぜマハティールは因縁の相手と組むことになったのか。さらに時間をさかのぼり、ここまでの政党間関係の変遷をごく簡単に振り返っておこう。

1957 年の独立から 2018 年の政権交代に至るまで、歴代内閣を担ってきたのは UMNO を中核とする政党連合であった。1970 年代末からの 30 年間は、与党連合の国民戦線に対して、イスラーム主義に立脚する PAS と、ノン・マレー、ノン・ムスリムの権利保障を求める DAP が対抗するかたちが与野党間関係の基本的な構図であった(図 1)。この間、野党連合が何度か模索されたが、民族・宗教政策における志向性の違いから内部対立に至るのが常であり、いずれも短命に終わった。

この構図を大きく変えたのが、2008 年総選挙での野党躍進を経て PKR、DAP、PAS の 3 党が結成した「人民連盟」である。民族横断政党の PKR が DAP と PAS の仲介役となり、与党の国民戦線との間に「政治改革か現状維持か」という対立軸を打ち立てた。これにより、与野党間関係は国民戦線の圧倒的優位から「二大政党連合制」へと変貌を遂げた(図 2)。

2015 年以降は 2 つのマレー人政党が分裂し、与野党間関係にさらなる変化が生じた。まず、野党側で宗教政策をめぐる PAS と DAP の対立が制御不能となり、人民連盟が瓦解する。その後 PAS 内の「進歩派」が離党して国家信託党(アマナ)を結成、PKR、DAP とともに希望連盟を結成した。PAS は第三勢力として独自路線をとった。

他方、与党側ではナジブ・ラザク首相(当時)の公金横領疑惑によって UMNO 内に軋轢が生じた。ナジブ批判派の急先鋒だった党長老のマハティールは、閣内でナジブを批判して副首相の座を追われたムヒディン・ヤシンらと組んで PPBM を結成する。そして 2018 年総選挙を前に PPBM が希望連盟に加盟し、アンワルへの後継を前提としてマハティールが首相候補に指名された(図 3)。

希望連盟の指導者にとってマハティールはかつての政敵であり、この時点で彼らと元 UMNO 幹部を結ぶ紐帯は「打倒ナジブ」という共通目標だけであった。

共通目標を失った与党、民族を軸に連携を再編する野党

希望連盟は選挙に勝ってナジブ政権の打倒を成し遂げたわけだが、その後の政党間関係を図式化するのはむずかしい。先に見た図 3 の縦軸をグッと短くしたらどうなるだろう。各党の位置が重なり合ってしまい、与野党の立場の違いは判然としなくなるはずだ。政権交代後におきていたのはそのような現象である。

新政権のもとで前政権期の疑惑が改めて捜査され、ナジブは起訴されて法の裁きを待つ身となっている。政治改革についても、法制度改正はあまり進んでいないものの、メディア統制や警察による干渉が緩和されるなど、実態としてはそれなりに政治的自由化が実現したと評価できる。つまり、希望連盟は当初の目標をある程度は達成しつつある。

だがそれは、希望連盟の 4 党を結びつけていた共通目標が失われたということでもある。その結果、与党連合の結束は弱まり、野党との違いも薄れた。もともと PPBM は UMNO 内の権力闘争が生んだ政党にすぎず、政策志向の点で両党に大きな違いがあるわけではない。総選挙後に UMNO を離党し、PPBM への入党を認められた議員もいる。逆に与党連合の内部では、言語と宗教が絡む教育政策などをめぐり、首相や PPBM 所属閣僚と DAP、PKR 議員らに対立する場面が目立っていた。

他方、下野した国民戦線の側は原型をとどめぬほど弱体化した。サバ州とサラワク州の地方政党などが離脱し、UMNO との連携を続けるのは独立前からのパートナーであるマレーシア華人協会（MCA）とマレーシア・インド人会議（MIC）だけになってしまった。いま両党が下院に持つ議席はあわせて 3 つに過ぎない。

むしろ野党側で重要なのは PAS と UMNO の協力である。この 2 党は長らくマレー人有権者の支持を争うライバルであったが、UMNO が下野したことにより、同じ民族を支持母体とする政策志向の近い野党同士という間柄になった。総選挙後に実施された一連の補欠選挙で両党は共闘し、10 回のうち 5 回の選挙で野党が勝利するという好成績を残している。PAS と UMNO は昨年 9 月に政党連合「国民合意」の結成に調印し、次回総選挙での共闘を約束した。

共通目標を失った希望連盟の結束が薄れるなか、野党側では補欠選挙での好成績に後押しされて民族と宗教を軸に連携関係の再編が進んできた。この状況に、PPBM などのマレー人議員は危機感を抱いたに違いない。一方で、図 3 の縦軸を圧縮したような状態にあっては、民族と宗教を軸にして政党連合を組み替えるのは比較的容易である。こうした環境のもとで、今回の政界再編騒ぎが生じた。

「国民連盟」の実現可能性は？

ならばこの先、マレー人政党主体の「国民連盟」政権が実現する日が来るのだろうか。23日に事態が動き始めるまでは、連立組み替えへの障壁は高いと見られていた。

まず、PPBM と組むことについて UMNO 内部に異論があった。副総裁のモハマド・ハサンは、選挙を経ずに政権入りするのは民主主義の原則に反すると述べ、PPBM との連携に異を唱えた⁶。モハマドがこう主張したのは、次の総選挙で勝てる可能性があると考えているからだろう。世論調査機関「[ムルデカ・センター](#)」の調査によれば、希望連盟に対する支持率は、総選挙直後の 75% から昨年 6 月末には 41% まで低下した。いまはもっと低いに違いない。選挙で勝てる可能性があるなら、ここで与党にすり寄るのが得策とは限らない。

加えて、PAS との連立にサラワクの地方政党が本当に同意するかという疑問が残る。「国民連盟」政権を成立させるには、18 議席をもつサラワクの GPS の協力が欠かせない。ところがサラワクの政党は、イスラーム法違反の厳罰化などを求める PAS に対して強い警戒感を示してきた。彼らを説得するのは容易ではないはずだ。

流れを決めるのはマハティールの次の決断

では、次の政権を担うのはいったいどの党派なのか。与野党がこぞってマハティール支持を表明しているなかにあっては、今後の流れを決めるのはやはり彼の決断であろう。

今回、こういうかたちで政情不安に陥ったのは、マハティールが後継問題の決着をずるずると先延ばしにしてきたからである。この結果を踏まえ、マハティールが考えを改めてアンワルの肩を持つなら、希望連盟が過半数を回復してアンワルが首相となる可能性が高い。サバのワリサンとサラワクの GPS もまたマハティール支持を表明していることから、マハティールが希望連盟を選ぶなら両勢力もそうするに違いないからだ。

逆にマハティールが「国民連盟」を選んだ場合、両陣営間の多数派工作がしばらく続くことになるだろう。3 月 9 日に連邦議会が開幕するまで混乱が続いたとしてもおかしくない。現時点では、この場合の最終的な結果は予測しがたい。

マハティールが暫定首相として中立の立場をとるということもあるかも知れない。その場合、両陣営はマハティールという強力なカードなしに多数派工作をしなければならない。この場合の帰結もまた予測しがたい。明確な勝者を決めるべく、マハティールが暫定首相として解散総選挙を選択するという展開もありうる。

23 日の急展開からこれまで、マハティールが自らの考えを国民に直接語る機会はなかった。次に彼が何を言うのか、誰もが注目している。■

(2020 年 2 月 25 日午前 9 時脱稿)

写真の出典

Tasnim News Agency, [Mahathir Mohamad](#)(CC-BY 4.0).

著者プロフィール

中村正志（なかむらまさし） アジア経済研究所地域研究センター東南アジア I 研究グループ長。博士（法学）。専門は比較政治学、マレーシア現代政治。おもな著作に、『[パワーシェアリング——多民族国家マレーシアの経験](#)』東京大学出版会（2015 年）、『[ポスト・マハティール時代のマレーシア——政治と経済はどう変わったか](#)』（共編著）アジア経済研究所（2018 年）など。



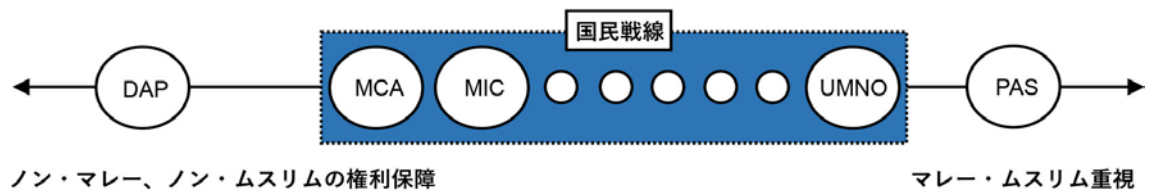
注

- ¹ “Possible revamp on the horizon,” *The Star*, February 6, 2020.
- ² これについては以下の拙稿を参照されたい。中村正志「92 歳のマハティール氏がなぜ次期首相候補なのか（後編）」『IDE スクエア』2018 年 4 月。
- ³ “Anwar's ok with Dr M staying on a bit longer,” *New Straits Times*, January 2, 2019.
- ⁴ “Exclusive: Malaysia's Mahathir pledges to step down for Anwar, but not before November,” *Reuters*, December 10, 2019.
- ⁵ これについては以下の拙稿を参照されたい。中村正志「1998 年のマレーシア：副首相解任により政府批判が高揚」アジア経済研究所編『アジア動向年報 1999』アジア経済研究所、1999 年。
- ⁶ “PM fuels talk of new ruling coalition,” *The Star*, February 7, 2020.



2月24日に首相を辞任したマハティール氏

図1 1970年代末から2008年総選挙までの政党間関係



(注) 国民戦線は時期により9党から14党で構成されていた。
(出所) 筆者作成。

図2 2008年総選挙から2015年半ばまでの政党間関係

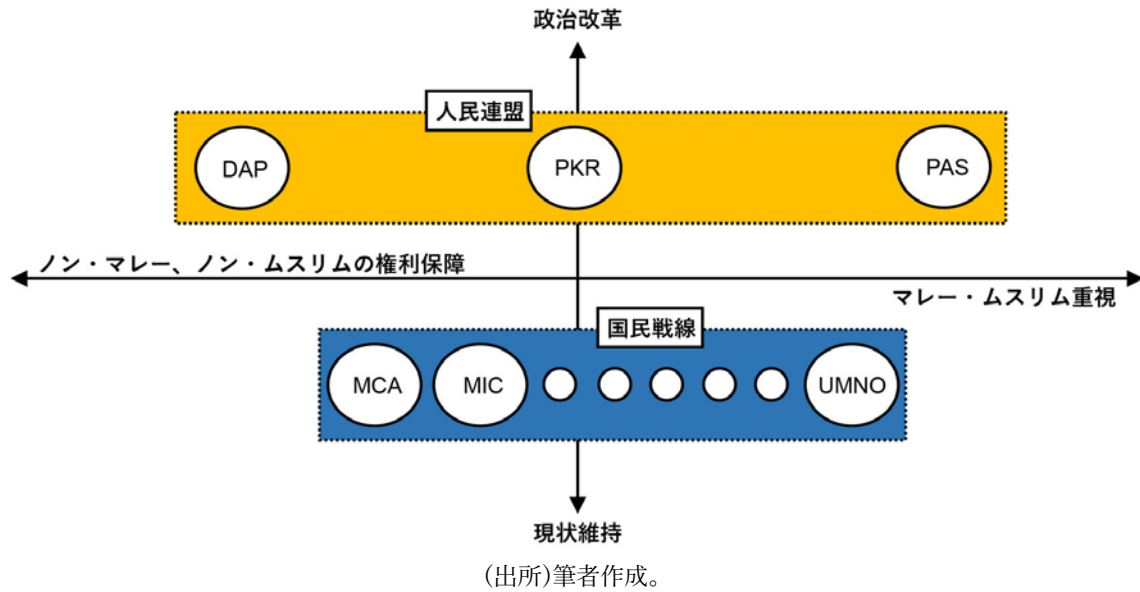


図3 2018年総選挙前の政党間関係

